

小中高の学業成績と学校的勉強への価値づけ

—— 認知的不協和による価値観形成 ——

須 藤 康 介

抄録

本稿の目的は、小中高の学業成績と学校的勉強への価値づけ（学校で勉強する内容を人生で重要なものだと思っているか）の関連を明らかにすることである。分析には、ESSM調査研究会が2013年に日本全国の30～64歳2893名に対して実施した、「教育・社会階層・社会移動全国調査」(ESSM2013) のデータを用いた。

分析の結果、通塾・学校タイプ・学歴・職業などの影響を統制しても、中学時に成績が高かった人々ほど、現在において学校的勉強の価値を肯定していることが示された。学齢期に成績が低かった人々は、学校の勉強は重要であるのに自分は習得できなかったという認知的不協和を回避すべく、学校的勉強の価値を否定していると考えられる。保護者が高学歴を期待しない家庭で育った場合、この傾向は明確であった。

専門・技術職に就いているかどうかなどの現在の社会生活が価値観形成にほとんど寄与しないという点、小学成績や高校成績よりも中学成績について関連が見出されるという点は、注目に値する。中学生段階は価値観形成の時期と言われるが、学校の勉強に関する意識も例外ではないと考えられる。見方を変え、義務教育修了までの「落ちこぼれ」を防止することが、生徒たちが大人になったときに学校教育に肯定的な意味づけを行い、社会全体における学校への信頼が高まることにつながり得る。

キーワード

学業成績、学校的勉強への価値づけ、保護者の学歴期待、認知的不協和、価値観形成

1. 問題関心

本稿の目的は、小中高の学業成績と学校的勉強への価値づけ（学校で勉強する内容を人生で重要なものだと思っているか）の関連を明らかにすることである。

学校で教わる勉強の内容は重要なのか。小学校低学年の四則演算や読み書きは別としても、中学校や高校で学ぶ内容が、人生で何らかの意味をもつのかどうかは、意見が分かれ

るところであろう。ベネッセ教育総合研究所（2010）によれば、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」と回答する子どもは、小学生で29.8%、中学生で52.8%、高校生で54.1%である。「学校の勉強など意味がない」と公然と述べる大人も珍しくない。矢野（2001）は、学校の勉強は大いに意味があるという立場で、意味がないと考える人々を、「専門バカを決め込んでいるか」「余暇が貧困か」「異分野の友達をもたぬか」と厳しく批評している。一方、本田（2009）は、学校の勉強に意義を見出せていない若者が多いことを一つの論拠として、特に普通科高校における教育内容を、職業的意義のあるものに組み替えていく必要性を主張している。

このように、学校的勉強の価値判断をめぐるでは対立的な議論が存在するが、実は両者は一つの前提を共有している。それは、人々が現在の社会生活との関連度から、学校的勉強の価値を判断しているという前提である。すなわち、学校的勉強の内容と現在の社会生活（仕事・趣味・交遊など）の関連が薄いことが、学校的勉強への低い価値づけをもたらしていることを前提にした上で、矢野は、現在の社会生活に問題がある（専門バカや余暇の貧困）と論じ、本田は、学校的勉強に問題がある（職業的意義の欠如）と論じていると整理できる。確かに、論理的に考えれば、学校で勉強した内容が現在の社会生活と関連している人々ほど、学校的勉強を高く価値づけるだろう。

しかし、人々の学校的勉強への価値づけを規定する要因は、現在の社会生活との関連度だけなのだろうか。人々の心性の別の側面を見逃していることはないだろうか。従来の議論とは異なるアプローチから、この問題を分析する余地があるように思われる。

代替のアプローチとして本稿で着目するのは、フェスティンガー（1957=1965）の認知的不協和理論である。認知的不協和理論とは、人は矛盾する認知を同時に抱えた状態を回避するために、自身の態度を変更するという理論である。イソップ物語の「きつねとブドウ」（すっぱいブドウ）がしばしば例として示される。この理論を援用すれば、学校的勉強の内容と現在の社会生活の関連度にかかわらず、学齢期に成績が高かった人々は、自分の努力や能力を無駄でなかったとしたいために、学校的勉強を高く価値づけ、学齢期に成績が低かった人々は、学校の勉強は重要であるのに自分は習得できなかったという認知的不協和を回避すべく、学校的勉強を低く価値づけるといったことが生じていると考えられる。ここにおいて「学校的勉強への価値づけは、学齢期の学業成績に規定される」という仮説が導かれる⁽¹⁾。

学校的勉強への価値づけに着目することの教育学的な意義は二つある。第一に、学校的勉強への価値づけという、学校教育に対する漠とした印象は、家庭の雰囲気として子ども世代に伝わる。したがって、当該意識は、本人が子どもをもった場合（または子どもと生活圏を共有した場合）の、子どもの学校適応を規定する一要因として位置づけられる。第二に、人々の学校的勉強に対する価値づけは、世間の空気として、現在の学校への風当たりを形成する。竹内（2011）が指摘するように、現代は学校への風当たりが強く、教育の正統性が揺らいでいる時代である。人々の学校教育に関する価値観は、学校現場における教育の「やりやすさ」を左右していると考えられる。

以上の問題関心に基づき、本稿では、どのような人々が学校で勉強する内容を重要だと思っているのかを、実証的に検討する。ただし、小中高の学業成績が人々の価値観形成に与える影響は、学齢期における保護者の学歴期待、すなわち出身家庭の文化によって

異なる可能性がある。ブルデュー（1979=1990）の文化的再生産論、および、それに基づく宮島・藤田編（1991）などの実証研究が示すように、出身家庭の文化は本人の学校観を大きく水路づける。家庭に向学校的な文化があった場合、小中高の学業成績によらず、学校の勉強の価値を肯定しているということもあり得る。したがって本稿では、保護者の学歴期待を統制変数として用い、学校教育に関する価値観形成のメカニズムをより詳細に検討する。

2. 使用データ

分析に用いるデータは、教育・社会階層・社会移動調査研究会（ESSM 調査研究会）が2013年に日本全国の30～64歳に対して実施した、「教育・社会階層・社会移動全国調査」（ESSM2013）である。サンプリングは、日本全国を地域ブロックと都市規模で層化した上で240地点を選び、各地点から20名を住民基本台帳に基づき系統抽出するという、層化二段抽出法を用いた。質問紙は、日本リサーチセンターによって郵送配布・訪問回収された。最終的な有効回答数は2893であり、計画サンプルサイズ4800に対する回収率は60.3%であった。詳細は中村・平沢（2014）を参照されたい。

本データを用いる理由は二点である。第一は、日本全国から無作為抽出された信頼性が高い大規模調査データであるという理由である⁽²⁾。そして第二は、本データが従来の社会調査と異なり、回答者の学齢期の教育経験を詳細に尋ねているという理由である。これまで、中村（2008）、本田（2008）など、人々の学校観に関する実証研究は数多く蓄積されてきたが、小中高の教育経験に関する変数が乏しく、それらが価値観形成にいかに関与しているのかについてはブラックボックスであった。小中高の学業成績とその共変量を同時に分析に投入できることのメリットは大きい。

3. 基礎集計の確認

本節では、学校的勉強への価値づけ、すなわち「学校で勉強する内容は人生で重要なものだ」という質問項目に対する回答の度数分布を確認する。結果が表1である。

表1 学校の勉強への価値づけの度数分布

	有効パーセント	有効度数
そう思う	23.5%	(674)
どちらかといえばそう思う	50.5%	(1446)
どちらかといえばそう思わない	20.9%	(597)
そう思わない	5.1%	(145)

表1より、7割以上の人々が学校的勉強に価値を見出していることが分かる。巷で学校批判が数多くなされるのに反して、多くの人々は学校の勉強の内容を肯定的に意味づけている。第1節で示したように、半数以上の中高生は学校の勉強の意味に懐疑を示しているが、大人たちはある程度意味を見出していることが窺える。

次に、世代・性別ごとの学校的勉強への価値づけの度数分布を確認する。なお、以下では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とする。結果が表2と表3である。

表 2 世代ごとの学校的勉強への価値づけ

		学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
		思う	思わない		
世代	30代	69.0%	31.0%	100.0%	(690)
	40代	72.9%	27.1%	100.0%	(852)
	50代	76.8%	23.2%	100.0%	(854)
	60代	78.8%	21.2%	100.0%	(466)
合計		74.1%	25.9%	100.0%	(2862)
独立性のカイニ乗検定		p=0.000			

表 3 性別ごとの学校的勉強への価値づけ

		学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
		思う	思わない		
性別	男性	71.1%	28.9%	100.0%	(1364)
	女性	76.8%	23.2%	100.0%	(1498)
合計		74.1%	25.9%	100.0%	(2862)
独立性のカイニ乗検定		p=0.001			

まず、表2より、年齢が上がるほど、学校的勉強の価値を肯定する者が増加することが分かる。この理由としては、年齢が上がるにつれて学校的勉強の価値に気づくという年齢効果と、年長世代ほど学校教育に希少価値があったという世代効果が考えられる。

また、表3より、女性のほうが学校的勉強に価値を見出している。これは、子育てに関わるのは男性よりも女性が多いという、現代社会のイデオロギーが関係している可能性がある。女性は子育てに関わる中で、子どもに「勉強しなさい」と明示的・暗示的に伝える役割を担うことが多く、その経験を通して自らの中で学校的勉強の価値が再構築されると考えられる。この考察の傍証として、子どもがいない者のみを分析対象とすると、男女の差はほとんど見られない。

4. 分析結果

ここから、小中高の学業成績と学校的勉強への価値づけの関連を分析する。まずクロス集計によって、両者の単純な関連を確認した後に、ロジスティック回帰分析によって、学校的勉強への価値づけの規定要因分析を行う。

4. 1. クロス集計

まず、クロス集計を行う。学業成績と学校的勉強への価値づけの関連を分析するのに先立って、後の分析で統制変数として用いる、保護者の学歴期待と学校的勉強への価値づけ

の関連を確認する。保護者の学歴期待は、中学生のときに「親（保護者）にできるだけ高い学歴を得るように言われた」という質問項目を用い、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」を「あてはまらない」とした。分析結果が表4である。以下、表中の γ はガンマ係数（独立変数と従属変数の関連の強さを絶対値0～1で表したもの）である。

表4 保護者の学歴期待と学校的勉強への価値づけの関係

		学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
		思う	思わない		
保護者の学歴期待	あてはまる	80.7%	19.3%	100.0%	(690)
	あてはまらない	71.9%	28.1%	100.0%	(2158)
合計		74.1%	25.9%	100.0%	(2848)
独立性のカイ二乗検定など		$p=0.000 \quad \gamma=0.241$			

表4より、学齢期に保護者から高学歴を期待されていた人々ほど、現在において学校的勉強に価値を見出していることが分かる。やはり、学業を重視するような家庭の文化で育った人々は、自身もそのような価値観を形成しやすいのだろう。とはいえ、保護者の学歴期待と学校的勉強への価値づけの関連はそれほど強固なものではなく、保護者の意識だけでなく、本人自身の経験も価値観形成に寄与していることが推察される。

それでは、小中高の学業成績と学校的勉強への価値づけの関連はどうなっているのだろうか。結果を表5～7に示す。成績は、「上の方」「やや上の方」を「上位」、「真ん中のあたり」を「中位」、「やや下の方」「下の方」を「下位」とした⁽³⁾。

表5 小6成績と学校的勉強への価値づけの関係

		学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
		思う	思わない		
小6成績	上位	80.4%	19.6%	100.0%	(1108)
	中位	72.3%	27.7%	100.0%	(1203)
	下位	65.1%	34.9%	100.0%	(538)
合計		74.1%	25.9%	100.0%	(2849)
独立性のカイ二乗検定など		$p=0.000 \quad \gamma=0.244$			

表6 中3成績と学校的勉強への価値づけの関係

		学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
		思う	思わない		
中3成績	上位	83.1%	16.9%	100.0%	(1119)
	中位	70.3%	29.7%	100.0%	(1059)
	下位	65.0%	35.0%	100.0%	(678)
合計		74.1%	25.9%	100.0%	(2856)
独立性のカイ二乗検定など		$p=0.000 \quad \gamma=0.310$			

表 7 高 3 成績と学校的勉強への価値づけの関係

		学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
		思う	思わない		
高3成績	上位	79.1%	20.9%	100.0%	(906)
	中位	73.7%	26.3%	100.0%	(1119)
	下位	68.3%	31.7%	100.0%	(577)
合計		74.4%	25.6%	100.0%	(2602)
独立性のカイニ乗検定など		$p=0.000 \quad \gamma=0.175$			

表5～7より、小中高で学業成績が高かった人々ほど、大人になってから学校的勉強に価値を見出していることが分かる。高校成績が小学成績・中学成績と比べて、学校的勉強への価値づけとの関連が弱くなっているのは、高校生にとって学校教育に関する意識と大きく関連するのは、校内成績よりも学校タイプ（進学校なのか、進路多様校なのか）であるためと考えられる。なお、小中高の成績は互いに強く相関しているため、クロス表で得られた知見は、互いの影響が交錯した擬似相関である可能性がある。この点は次項のロジスティック回帰分析で検証する。

次に、保護者の学歴期待によって、学業成績と学校的勉強への価値づけの関連が異なるのかどうかを分析する。保護者の学歴期待を統制変数とし、小中高の学業成績と学校的勉強への価値づけの関連を示したものが表8～10である。

表 8 保護者の学歴期待ごとの小 6 成績と学校的勉強への価値づけの関係

保護者の学歴期待			学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
			思う	思わない		
あてはまる	小6成績	上位	82.6%	17.4%	100.0%	(386)
		中位	79.9%	20.1%	100.0%	(219)
		下位	74.1%	25.9%	100.0%	(85)
	合計		80.7%	19.3%	100.0%	(690)
	独立性のカイニ乗検定など		$p=0.184 \quad \gamma=0.142$			
あてはまらない	小6成績	上位	79.2%	20.8%	100.0%	(721)
		中位	70.6%	29.4%	100.0%	(979)
		下位	63.3%	36.7%	100.0%	(452)
	合計		71.9%	28.1%	100.0%	(2152)
	独立性のカイニ乗検定など		$p=0.000 \quad \gamma=0.241$			

表 9 保護者の学歴期待ごとの中 3 成績と学校的勉強への価値づけの関係

保護者の学歴期待			学校的勉強への価値づけ		合計	有効度数
			思う	思わない		
あてはまる	中3成績	上位	83.7%	16.3%	100.0%	(387)
		中位	77.6%	22.4%	100.0%	(201)
		下位	75.5%	24.5%	100.0%	(102)
	合計		80.7%	19.3%	100.0%	(690)
	独立性のカイニ乗検定など		$p=0.071 \quad \gamma=0.189$			
あてはまらない	中3成績	上位	83.1%	16.9%	100.0%	(727)
		中位	68.5%	31.5%	100.0%	(854)
		下位	62.9%	37.1%	100.0%	(572)
	合計		71.9%	28.1%	100.0%	(2153)
	独立性のカイニ乗検定など		$p=0.000 \quad \gamma=0.321$			

表 10 保護者の学歴期待ごとの高3成績と学校の勉強への価値づけの関係

保護者の学歴期待			学校の勉強への価値づけ		合計	有効度数
			思う	思わない		
あてはまる	高3成績	上位	82.7%	17.3%	100.0%	(243)
		中位	82.7%	17.3%	100.0%	(249)
		下位	74.8%	25.2%	100.0%	(163)
	合計		80.8%	19.2%	100.0%	(655)
	独立性のカイニ乗検定など		$p=0.087 \quad \gamma=0.142$			
あてはまらない	高3成績	上位	77.7%	22.3%	100.0%	(660)
		中位	71.2%	28.8%	100.0%	(866)
		下位	65.9%	34.1%	100.0%	(413)
	合計		72.3%	27.7%	100.0%	(1939)
	独立性のカイニ乗検定など		$p=0.000 \quad \gamma=0.183$			

表8～10から、保護者が高学歴を期待しない家庭で育った人々で、学業成績と学校の勉強への価値づけの関連が大きいことが分かる。換言すると、家庭に向学校的文化が希薄である場合、自身の学校経験のもつ意味が大きくなるということである。

4. 2. ロジスティック回帰分析

クロス集計で得られた知見が、他の様々な変数の影響を統制しても見出されるかどうかを検証するため、学校の勉強への価値づけを従属変数とするロジスティック回帰分析を行う。結果が表11である。モデル1は学齢期の変数のみに焦点化したもの、モデル2はその後の社会生活における主要な変数を追加したものである⁽⁴⁾。

表 11 学校の勉強への価値づけの規定要因（ロジスティック回帰分析）

	モデル1			モデル2		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
年齢（10歳単位）	0.251	1.285	***	0.256	1.291	***
女性ダミー	0.302	1.352	**	0.333	1.395	**
大都市ダミー	-0.044	0.957		-0.077	0.926	
小6成績（5段階）	-0.041	0.960		-0.052	0.950	
中3成績（5段階）	0.307	1.360	***	0.279	1.322	***
高3成績（5段階）	0.114	1.121	*	0.099	1.104	*
小6通塾ダミー	-0.023	0.977		-0.043	0.958	
中3通塾ダミー	0.072	1.075		0.081	1.084	
高3通塾ダミー	0.192	1.211		0.115	1.122	
国私立中学校ダミー	-0.065	0.937		-0.034	0.967	
高校の大学短大進学率（%）	0.003	1.003	*	0.001	1.001	
最高学歴（教育年数換算）				0.085	1.088	*
専門・技術職ダミー				0.170	1.185	
専門・技術職以外有職ダミー				-0.110	0.896	
自己能力不安感（5段階）				0.045	1.047	
子どもありダミー				0.075	1.078	
（定数）	-1.688		***	-2.717		***
Nagelkerke擬似決定係数	0.069			0.074		
尤度比のカイニ乗検定	$p=0.000$			$p=0.000$		
有効度数	2538			2483		

*** $p<0.001$ ** $p<0.01$ * $p<0.05$

表11の2つのモデルに共通して注目すべきは、小学成績は学校的勉強への価値づけにほとんど影響せず、中学成績が学校的勉強への価値づけに大きく影響しているということである。クロス集計で確認された、小学成績と学校的勉強への価値づけの関連は、中学成績を共通要因とした擬似相関ということになる。七五三と呼ばれるように、小学校から中学校に進むと、学校の勉強についていけない生徒が多数生じるが、そこでついて来られた生徒が、その後の人生で、学校的勉強を重要だと認識しているということになる⁽⁵⁾。

なお、通塾や国私立中学校への在籍は、学校的勉強への価値づけと明確には関連していない。通塾や中学受験を通して学校的勉強への価値づけが加熱されるといった可能性も想定されたが、必ずしもそうではなく、あくまで学校内での学業的成功が、人々の意識に刻印を残すということである。私立中学校進学が価値観形成に与える影響が限定的であることは、須藤（2013）の知見とも整合的である。

また、モデル2で統計的に有意な変数は、最高学歴という学齢期と大人期の境界に位置する変数のみであり、現在の職業や自己能力不安感はある有意ではない。したがって、少なくとも今回分析した変数から読み取った限り、人々は大人になってからの社会生活と過去の学校経験を照合して学校的勉強の価値を判断しているというよりも、学齢期に形成した価値観を、大人になってからもそのまま維持していると考えられる。

最後に、保護者の学歴期待別にロジスティック回帰分析を行う。分析結果が表12と表13である。表12がモデル1、表13がモデル2に相当する。なお、ここでは結果の見やすさを優先して群別の分析を行っているが、表11に小中高の学業成績と保護者の学歴期待の交互作用項を追加したモデルで分析を行っても、得られる知見はほぼ同じであった。

表 12 学校的勉強への価値づけの規定要因（ロジスティック回帰分析）モデル 1 保護者の学歴期待別

	保護者の学歴期待					
	あてはまる			あてはまらない		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
年齢（10歳単位）	0.258	1.295	*	0.238	1.269	***
女性ダミー	0.475	1.608	*	0.313	1.368	**
大都市ダミー	0.010	1.010		-0.060	0.942	
小6成績（5段階）	0.011	1.011		-0.084	0.919	
中3成績（5段階）	0.096	1.101		0.383	1.467	***
高3成績（5段階）	0.165	1.179		0.099	1.104	
小6通塾ダミー	-0.206	0.814		-0.002	0.998	
中3通塾ダミー	0.260	1.298		-0.020	0.980	
高3通塾ダミー	-0.194	0.824		0.344	1.410	
国私立中学校ダミー	0.037	1.038		-0.093	0.911	
高校の大学短大進学率（%）	0.006	1.006		0.002	1.002	
（定数）	-1.271	0.281		-1.665		***
Nagelkerke擬似決定係数	0.057			0.073		
尤度比のカイ二乗検定	p=0.016			p=0.000		
有効度数	644			1889		

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

表12と表13から、保護者が高学歴を期待しない家庭で育った場合のみで、中学成績が学校的勉強への価値づけに影響していることが分かる。クロス集計で示された、保護者が高学歴を期待していなかった人々ほど成績の影響が大きいという知見が、中学成績に焦点化されて明らかになった。保護者が高学歴を期待していた場合、家庭の向学校的文化に

表 13 学校的勉強への価値づけの規定要因（ロジスティック回帰分析）モデル 2 保護者の学歴期待別

	保護者の学歴期待					
	あてはまる			あてはまらない		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
年齢（10歳単位）	0.301	1.352	*	0.230	1.258	***
女性ダミー	0.646	1.908	**	0.300	1.350	**
大都市ダミー	-0.020	0.980		-0.091	0.913	
小6成績（5段階）	-0.051	0.950		-0.080	0.923	
中3成績（5段階）	0.107	1.113		0.352	1.421	***
高3成績（5段階）	0.111	1.117		0.094	1.098	
小6通塾ダミー	-0.230	0.795		-0.015	0.985	
中3通塾ダミー	0.269	1.309		-0.011	0.989	
高3通塾ダミー	-0.294	0.745		0.297	1.346	
国私立中学校ダミー	0.132	1.141		-0.066	0.936	
高校の大学短大進学率（%）	0.002	1.002		0.000	1.000	
最高学歴（教育年数換算）	0.170	1.185	*	0.047	1.048	
専門・技術職ダミー	0.188	1.207		0.141	1.151	
専門・技術職以外有職ダミー	0.033	1.034		-0.145	0.865	
自己能力不安感（5段階）	0.026	1.027		0.055	1.056	
子どもありダミー	-0.162	0.851		0.151	1.163	
（定数）	-3.336		**	-2.262		***
Nagelkerke擬似決定係数	0.074			0.075		
尤度比のカイ二乗検定	p=0.019			p=0.000		
有効度数	636			1842		

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

よって、成績に左右されずに学校的勉強への価値づけが形成されるが、家庭にそのような文化が存在しなかった場合、本人のパフォーマンス（学校の勉強に適応できたかどうか）によって、学校的勉強への価値づけが形成されると考えられる。

分析結果は省略するが、世代（30代・40代・50代以上）ごとの分析を行っても、保護者が高学歴を期待していなかった場合、中学成績が学校的勉強への価値づけを規定するという結果は変わらなかった⁽⁶⁾。学校的勉強の内容は、学習指導要領の改訂に伴って、時代とともに変化している。しかし、中学成績によって学校的勉強への価値づけが決まるという人々の心性は、どの世代であっても成り立っている。

5. まとめと結論

以上の分析から、中学時に成績が高かった人々ほど、現在において学校的勉強の価値を肯定しており、特に向学校的な家庭の文化（保護者が高学歴を期待する家庭環境）が存在しなかった場合、その影響は大きいことが示された。家庭に向学校的文化が存在せず、かつ本人の成績が低かった人々は、認知的不協和を回避すべく、学校的勉強の価値を否定していると考えられる。現在の社会生活との関連度から学校的勉強の価値を判断しているという見方とは別の、人々の心性が浮かび上がってくる。

そして、専門・技術職に就いているかどうかや自己能力不安感は価値観形成にほとんど寄与しないという点、小学成績や高校成績よりも中学成績について関連が見出されるという点は、注目に値する。中学生段階は価値観形成の時期と言われるが、学校の勉強に関する意識も例外ではないと考えられる。今後さらなる検証が必要であるが、この時期に形成

された価値観が、家庭の雰囲気として子ども世代に伝わるとともに、現在の学校に対する世間の風当たりの背景の一つとなっている可能性がある。見方を変えると、義務教育修了までの「落ちこぼれ」をできる限り防止することが、生徒たちが大人になったときに学校教育に肯定的な意味づけを行い、社会全体における学校への信頼が高まることにつながり得る。通塾や国私立中学校への在籍ではなく、あくまで校内の成績が現在の意識を規定していることをふまえると、各学校内で学力下位の生徒を見捨てない体制を整えることが重要となるだろう。もちろん、それができると、行政的な教員人事配置も同時に検討する必要がある。

本稿では、学齢期における成績・通塾・学校タイプなどが学校的勉強への価値づけに与える影響を分析したが、教師による働きかけ（たとえば、勉強の重要性を強調したか）の影響には分析が及ばなかった。教師による働きかけは、学校教育の内部過程として無視できない要素である。人々の学校教育に関する価値観がいつどのように形成されるのか、引き続き、多面的な研究が求められる。

<注>

- (1) P.ウィリス（1977=1996）の対抗文化理論も、学齢期に成績が低かった人々が大人になってからも学校の勉強の価値を否定する（そしてそれが子どもに伝わる）という点で、認知的不協和理論による説明と類似している。しかし、対抗文化理論が、労働者階級の子どもが最初から反学校文化を有していると想定しているのに対して、認知的不協和理論では、多くの子どもは学校の勉強の価値を最初は認めていたが、次第に勉強についていけなくなることを通して、自身の価値観を調整すると考える。実際、小学校低学年において、「勉強が得意になりたい人」と聞くと、ほぼ全員が迷わず挙手する様子が見受けられる。
- (2) ただし、本調査に限らず社会調査全般の問題点として、回答者が社会的・経済的・心理的に安定した層に偏ることが挙げられる。したがって、本稿で得られる知見も、全般的にやや上振れしているという留保が必要である。
- (3) 本調査では、小学校についてはクラス内成績、中学校・高校については学年成績を尋ねている。小学校において、クラス内成績と学年成績はほぼ一致するはずであるが、小学生には学年成績という意識が希薄であろうという配慮から、このような尋ね方とした。
- (4) 分析に用いる変数の記述統計量を表14に示す。通塾ダミーは「塾・予備校」を半年以上経験したことを意味する。最高学歴は中退を含まない。専門・技術職であるかどうかは、職業の具体的記述に基づいてアフターコードしている。自己能力不安感は、「自分には能力がないのではないかと不安に思うことがありますか」という5件法の変数であり、値は大きいほど不安感が大きいことを表す。
- (5) 七五三とは、学校の勉強についていける児童・生徒が、小学校で7割、中学校で5割、高校で3割と減少していくことである。ただし、ベネッセ教育総合研究所（2016）によれば、算数／数学の授業を「ほとんどわかっている」「だいたいわかっている」と答えた児童・生徒は、2001年では小学5年生で69.1%、中学2年生で53.5%、高校2年生で32.6%と、まさに七五三だったものが、2015年では小学5年生で77.9%、中学2年生で59.7%、高校2年生で47.3%と、全般的に上昇している。
- (6) モデル1による分析を行ったところ、中3成績の回帰係数が、30代では0.274、40代では0.647、50代以上では0.256であった。モデル2はサンプルサイズに比して独立変数が多いことから、分析結果が不安定であった。

表 14 使用する変数の記述統計量

	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
学校の勉強への価値づけダミー	2862	0.000	1.000	0.741	0.438
年齢（10歳単位）	2893	3.000	6.400	4.804	0.994
女性ダミー	2893	0.000	1.000	0.524	0.500
大都市ダミー	2893	0.000	1.000	0.267	0.442
小6成績（5段階）	2878	1.000	5.000	3.310	1.100
中3成績（5段階）	2885	1.000	5.000	3.233	1.127
高3成績（5段階）	2620	1.000	5.000	3.171	1.055
小6通塾ダミー	2881	0.000	1.000	0.272	0.445
中3通塾ダミー	2885	0.000	1.000	0.374	0.484
高3通塾ダミー	2616	0.000	1.000	0.160	0.366
国私立中学校ダミー	2881	0.000	1.000	0.072	0.258
高校の大学短大進学率（%）	2665	0.000	100.000	51.041	34.278
最高学歴（教育年数換算）	2887	9.000	18.000	13.558	2.097
専門・技術職ダミー	2831	0.000	1.000	0.154	0.361
専門・技術職以外有職ダミー	2831	0.000	1.000	0.644	0.479
自己能力不安感（5段階）	2873	1.000	5.000	2.854	1.008
子どもありダミー	2877	0.000	1.000	0.757	0.429

<参考文献>

- P.ブルデュー 1979=1990『ディスタンクシオン ― 社会的判断力批判』藤原書店（石井洋二郎訳）。
- L.フェスティンガー 1957=1996『認知的不協和の理論 ― 社会心理学序説』誠信書房（末永俊郎編訳）。
- P.ウィリス 1977=1996『ハマータウンの野郎ども―学校への反抗 労働への順応』ちくま学芸文庫（熊沢誠・山田潤訳）。
- 須藤康介 2013「私立中高一貫校における中入生と高入生の比較分析 ― 中学受験のメリット・デメリットの実証的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻 pp.193-202。
- 竹内洋 2011『学校と社会の現代史』左右社。
- 中村高康 2008「高学歴志向の趨勢に関する二時点データの比較分析 ― 年齢・世代・時代と階層効果の基礎的考察」中村高康編『階層社会の中の教育現象』2005年SSM調査研究会 pp.21-33。
- 中村高康・平沢和司 2014「教育体験と社会階層 ― ESSM2013データを用いて」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』第66回 pp.246-249。
- ベネッセ教育総合研究所 2010『第2回 子ども生活実態基本調査報告書』ベネッセコーポレーション。
- ベネッセ教育総合研究所 2016『第5回 学習基本調査報告書』ベネッセコーポレーション。
- 本田由紀 2008「高校教育・大学教育のレリバンズ」谷岡一郎・岩井紀子・仁田道夫編『日本人の意識と行動 ― 日本版総合的社会調査JGSSによる分析』東京大学出版会 pp.211-223。
- 本田由紀 2009『教育の職業的意義 ― 若者、学校、社会をつなぐ』ちくま新書。
- 宮島喬・藤田英典編 1991『文化と社会 ― 差異化・構造化・再生産』有信堂。
- 矢野眞和 2001『教育社会の設計』東京大学出版会。

<付記>

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A、課題番号23243083）による研究成果の一部である。なお、データの使用にあたっては、教育・社会階層・社会移動調査研究会（ESSM調査研究会）の許可を得た。